担当教員：森　康晃先生

科目名：国際知財B

氏名：樋口陽祐

学籍番号：1w152314-6

所属：基幹理工学部

2020根円の技術と新製品の展望

1. 2020年オリンピックに向けた関心のある事例
   1. 未来年表より
      1. 新聞紙の代わりになる薄く柔らかい携帯電子が実用化する
      2. 脳血流を信号化してテレビ、エアコンなどを操作するBMI技術が実用化する
   2. 簡単特許検索より
      1. 染谷隆夫氏、関谷 毅氏による伸縮性回路基板：　今までのシリコンで作られた硬い電子素材と違い、薄く柔らかい電子回路となっている。非常に薄いのにもかかわらず、丈夫であり医療用途などに幅広く応用できる。その軽さから、ウェアラブル機器の技術の発展に繋がるであろう。オリンピックに向けて複雑な日本の交通のナビゲーションを行うウェアラブル機器などに応用できる。
      2. トヨタ自動車株式会社による運転支援システム：　2020年のオリンピックに向けて、自動車の自動運転技術が開発される中、“車両の走行位置に応じた適切な運転支援が行える運転システム”がトヨタ自動車によって開発された。運転者を運転支援システムによって支援することで、より安全な運転を行うことができる。このシステムでは、近辺の車の位置を組織的に捉えることで、センサーのみでは得られないような情報を交換し合うことで、運転支援を行う。
2. 2020年オリンピックに向けて有望と考えられる新しい製品や事業に関する自分の考え方やアイディア

2020年オリンピックに向けて、東京を外国の人々が不便に感じないような環境にしていく必要がある。そのためにも2020年東京オリンピックでは、多言語音声翻訳技術が重要になってくると考える。

多言語音声翻訳技術を開発し高度化していくためには、既存の翻訳技術を統合していくことが最適だと考える。そのためにも、多言語音声翻訳技術の知財マネジメントはオープン戦略で行っていく必要がある。現在、SiriやGoogle Now等といった音声認識し、返答するAIが存在する。また、Google翻訳では既に入力された単語や、その翻訳された単語を発生する技術に長けている。しかし、こういった細分化された技術はあるが、これらをすべて合わせた技術である多言語音声翻訳技術は存在しない。音声発声技術や翻訳に関する技術を持つ企業が互換性を持った多言語翻訳機能を開発していくことで、2020年までにより良い多言語音声翻訳技術が開発するであろう。

オープン戦略を採用することで、様々な利益が得られる。まず、2020年のオリンピックを利用することで、技術の認知度を上げることができる。1996年の東京オリンピックでは、外国人に目的の場所の在りかなどを知らせるために、ピクトグラムが採用された。その際、ピクトグラムに使われた絵に関して著作権を申請しなかったが、その後のオリンピックにも採用され、公共施設などで利用されるようになった。多言語音声翻訳技術もピクトグラムのように完全にオープンするとは言わないが、多言語音声翻訳技術のシステムは共通技術として今後も広く使われるようになるであろう。次に、多言語翻訳技術を無料で提供することで、それを用いたアプリケーションやソフトウェアの競争を図ることができる。さらにこの技術に互換性があることから、自社のみならず他社の携帯端末での翻訳アプリのシェアを広げることも可能である。さらに、技術のさらなる促進が期待できる。技術がオープンソースであることから、どの企業もこの技術の開発に手を出すことができ、翻訳以外にも多言語音声翻訳技術を開発するにおいて開発された技術を応用できる。

以上より、東京オリンピックという世界に広める絶好の機会を利用し、多言語音声翻訳技術をオープン戦略で開発していくべきである。